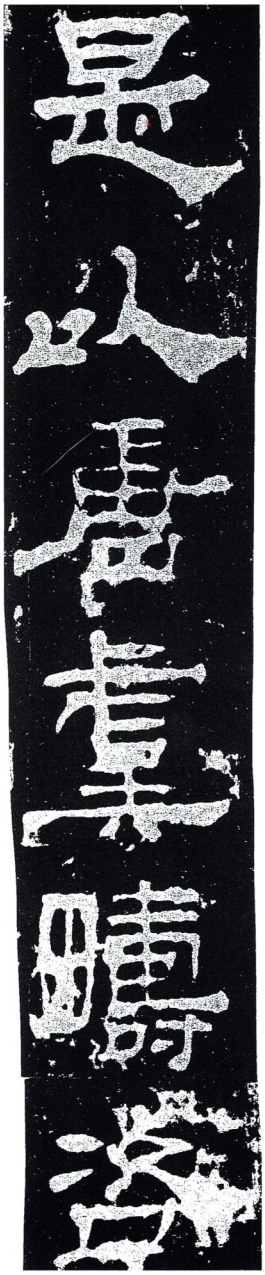
誌上講習

西嶽華山廟碑（せいがくかざんびょうひ）



福島松韻書

是

日の縦画を引き締めて、点が二つあります。最終画の八分が右下へ強調されています。

以

口と人、人の一画目が上がって見えますが、独特なまとめ方で面白いですね。八分をもう少し強めに書いてもいいですね。

唐

横画が多いですが、等間隔に書き、左払いは突き止め、右への八分で左右のバランスを良く書いて、やや左払いが強くなったかも知れません。

虞

この文字は縦が高いので、少し他と合わせた高さで書きました。四画目右下への線、字典ではこのように実線で入っています。七の一画目左下の線と、右の線とが上手くバランスがとれていて下の八分も伸びやかです。

疇

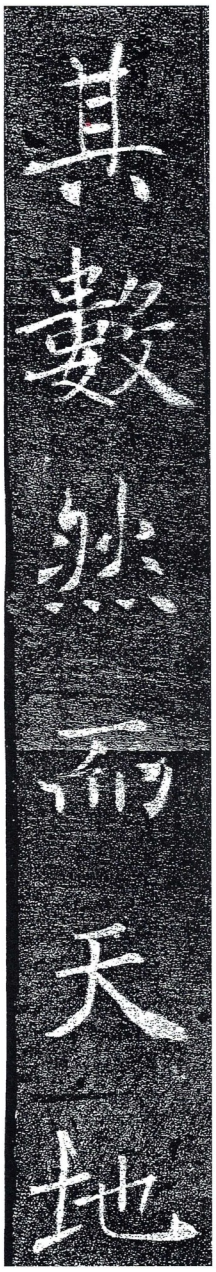
偏の田が広がってしまったので、下へしぼって書いて下さい。広がりました。旁の横画は平行で等間隔がいいですね。

咨

欠の八分が右下へ長く強く、口の最終画が長く、八分と対比してバランスをとっているように見えてくる。

誌上講習

雁塔聖教序（がんとう しょうぎょう のじょ）



坪之内柏舟書

其　縦の左の線と右の線のふくらみが原帖の様に書けなく、狭い感がある。

數　偏、先ず「中」を書き次に横画。次に「中」を書き「女」と書いています。

然　左の「夕」は垂直の様に下りている。右の「犬」は「火」に作ることがある。

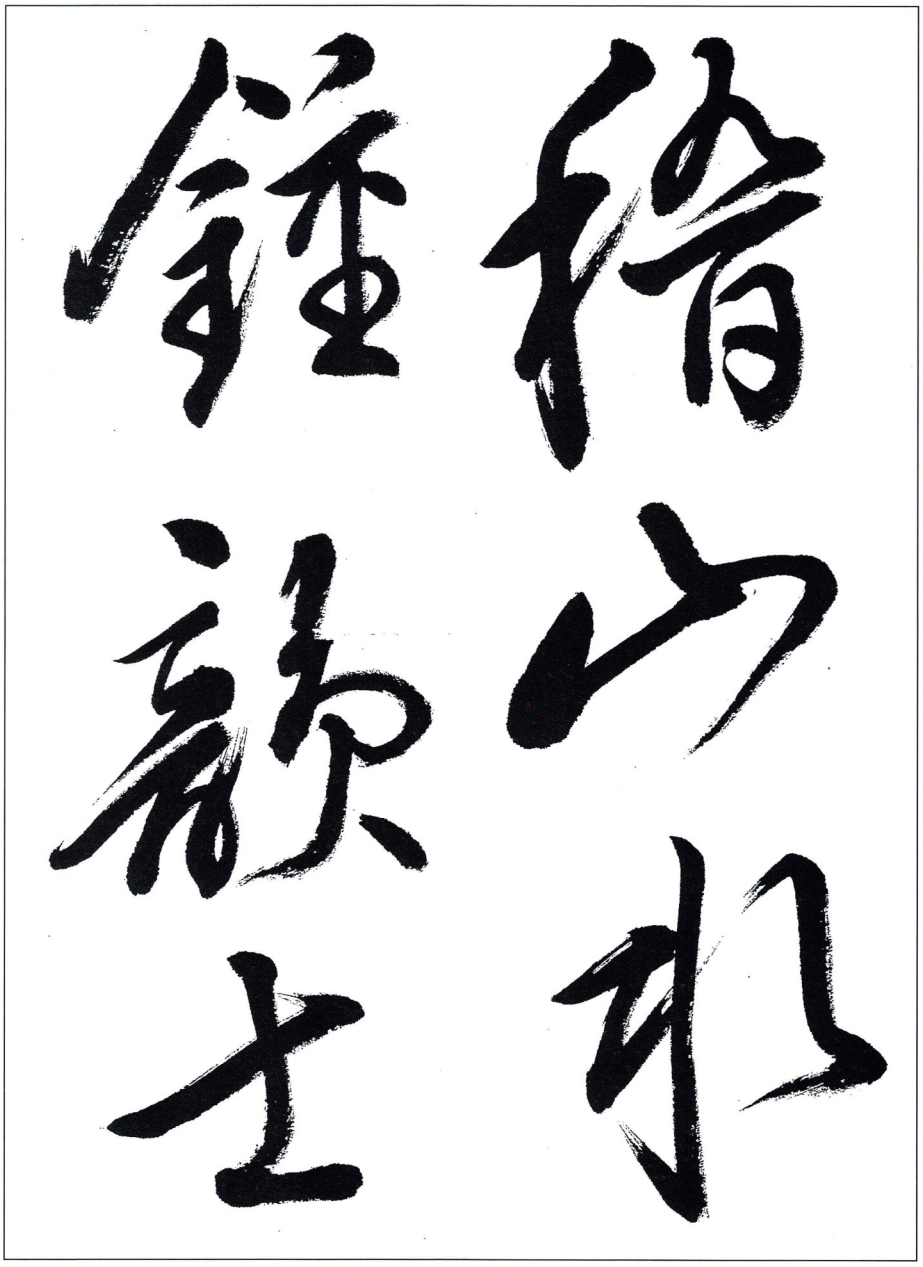
而　第一筆、かなり長い。下部の横画は見えないが、動きが大きい。私は細い目に書いてみました。

天　全体にスキッとしており、最終画のハネも堂々としている。

地　字の最終画、伸び伸びと、細いが、長く力強い線となっている。しなるような線、勉強して書いて下さい。

誌上講習

董其昌―秣陵帖（まつりょうじょう）―



小田原翠浦書

稽　打ち込んだ一画目ゆったりと下へ　旁は、リズムをつけ　最終画まで。

山　ゆったりとした筆運び　最後まで気をゆるめずに運びました。

水　上から受けて　字の中の「白」に注意を払いました。

鍾　偏から旁へ　最終画まで　急がずに、筆を運びました。

士韻　一字・一字・すべてに　気持ちがつながって　運ばれているのに　見入っています。

誌上講習　黄庭堅（こうていけん）

井上峰雪書

彼の変幻自在の用筆故に、臨書は非常に難しい面もありますが、今回は原帖に見られる多折法による表現の拡張がみられ、少しワクワク気分で、学んで見ましょう。

（平地に致れば　漢東の太＊守）

到　旁は伸び伸びと長さの制約を余り気にせず。扁の下部空間を呼び込む。

平　前の到の旁、瀧の流れの様な余勢をかって、右上がり、一気に運筆、小振りに締める。

地　扁と旁の間の空間を呼び込み、連なり肥痩の運筆、限られたスペースで大きく見せる。

漢　扁の部丁寧に。旁の部緩急をつけて。扁と旁の字形、平行に反るよう運筆。

東　勢いに乗じて一気呵成の運筆ですが、下部左右の払い、ギリギリの間隔で、バランスを取っている。

太　画数の少ない文字ですが、左右の払い、用筆の揺るぎを学び、比較的細い線で、大きく緩く仕上げます。